攻防自在・空手拳法

十八の研究

師範 摩文仁賢和著

附録 秘書 武備誌



東京・興武館・發行

空手拳法

師範 摩文仁賢和著

師範 摩文仁賢和著

空手研究叢書第二篇

攻防自在
空手拳法

十八(セーパイ)の研究

（附・秘書「武備誌」）

東京 興武館 發行



前列右・小西康裕氏　中央・本部朝基氏　左・著者



（構へ方）



（受け方）



（拂ひ受けの姿勢）



（鈎手の構へ）

序にかへて

著者

何に事も打ちわすれたり
ひたすらに
武の島さして
漕ぐがたのしき

空手拳法の歌

法曹空手團會長
辯護士　松本静史　作

一、碧空たかき芙蓉峰
　　清き姿のそれの如
　わが神洲の大丈夫が
　　雄叫びなして揮ふ拳
　鳴るくろがねのその腕に
　　櫻吹雪ぞちりかかる。

二、南風薫る若草の
　　みどりの丘に撫子と

　色を競へる手弱女も
　　防護のために起つときぞ
　一拳たかく搏ちひびき
　　膺懲の意氣に燃ゆるなり。

三、春朝月の影ふみて
　　冬夕星の冴ゆるまで
　鍛へにきたへいそしみて
　　龍攘虎揮の早わざを
　事あるときぞ眼に見せん
　　そこに我等の誇りあり。

—をはり—

兵法の實の道

宮本武藏

世の中に兵法の道をならひても、實の時の役にはたつまじきと思ふ心あるべし、其儀に於ては、何時にても役に立つやうに稽古し、萬事に行ひ役に立つ様に當る事、是兵法の實の道也。

（「五輪之書」地の巻より）

攻防自在空手拳法 十八の研究 目次

第一章　空手の豫備運動

我が流派に於ては必ず、基本型や開手型を行ふ前に豫備運動を行ふ。故に拙著「攻防自在護身術空手拳法」にも既に、豫備運動の事を記載いたせしが、再び之れを書くことにする。

即ち豫備運動は筋肉其の他各部關節の柔軟を圖り、兼て其の強靱性と耐久力を養成せしめ、すべての型を習ふ場合に非常に習得しやすく、便利なるが爲めである。

A　脚の運動

イ、姿勢は直立不動の姿勢にて兩手を腰に取り、兩足は八字立に開き、顎を引き付け、初め右足を指先に力を入れ、踵を上げ、之れを靜かに下して元の位置になし、左右交る交る行ふ事數回。

ロ、兩足の指先に力を入れて、同時に踵を上げて元の位置となし、之を行ふ事數回。

ハ、姿勢は初めと同じ。兩踵に力を入れ、胸を開き、足の指先を上に向けて、靜かに元の位置に

なし、之れを繰り返して行ふ事數回。

ニ、兩足を廣く開き、左足を曲げて、右足を眞直に延ばし、左手掌は左足の膝頭を押へ、之を左右交る交る行ふ事數回。

ホ、兩足を引き付けて直立し、腰を前に曲げて、兩手は膝の上に置き、其のまゝ座する如くしては立ち立ちして、之れを行ふ事數回。

ヘ、兩足を交る交る前に出して、足さき（足首）をかるく廻す事數回。

B 首の運動

イ、姿勢は直立不動にて、兩手は左右の腰に取り、兩眼を閉じ、首は輕く下に垂れて、左から次第に上に上にと右に廻し、右から又元の如く次第に左に廻す事三、四回。

ロ、兩眼を閉じ、兩手は腰にし、後に腰を曲げては靜かに元の位置になし、之れを行ふ事三、四回。

ハ、姿勢は前と同じ、兩眼は大きく開き、靜かに首を右から左に廻し、之れを反對に行ふ事三、四回。

C 腰の運動

イ、姿勢は兩足を八字立に開きて立ち、腰を前に曲げて兩手は下にさげ、膝は眞直になし、兩手にて下に押へ付ける如く動かす事數回。

ロ、姿勢は前と同じ、兩手は後に向けて延ばすと同時に、腰を低くして兩足は四股になる樣にし、兩膝を眞直に元の姿勢に立つと同時に、後の兩手を強く握りて、兩腕の處に置き、之れを繰返して行ふ事數回。

ハ、兩手を頭の上に眞直に延ばし、其のまゝ左右に交る交る腰を延ばす事數回。

ニ、立ち方は前と同じ、兩手は、其のまゝ下に垂れて、體を左右に廻し、兩手は輕く振る樣にする事數回。

（尚空手の補助運動として拳の握り方と突き方、蹴り方、打ち方、臂當、立ち方、轉身法、握力增進法等は拙著「攻防自在護身術空手拳法」に挿繪を以て詳しく說明したれば、就きて參照せられたし）

第二章　空手受け方名稱

昔から空手拳法の基本型や、開手型には皆立派な名稱があるが受け方に就いての名稱がないのが、實に遺憾の至りである。

私は教授上、說明上又は子弟の受け方稽古上、便利なるが爲めに、左の通り受け方名稱をつけた。——

A　受け方名稱

上段受け
横受け（內、外）
横打ち（內、外）
繰り受け（內、外）

打ち落し（內、外）
裏受け（內、外）
手刀受け（內、外）
拂ひ受け（內、外）
大裏受け（內、外）
輪受け（上段、中段、下段）
空受け
突き受け
釣手
受け流し
掬ひ受け
臂受け
孤受け
押へ受け

支へ受け
臂支へ受け
關節支へ受け
兩手受け
振り捨て（足の受け方）
掬ひどめ（足の受け方）
拂ひ受け（足の受け方）
膝かへし（足の受け方）
さすまた（足の受け）
逆捨身（投げ方）
合掌返し（投げ方）
交叉受け（投げ方）
後投げ
掬ひ投げ

裏投げ
以上の通りである。

B　組手に就いて

空手を分解すると、基本型と開手型、組手の三つに分つ事が出來る。
基本型は空手の總ての基本で、目的は身體をして定められたる姿勢を取り　氣息の呑吐と力の入れ抜きを調和させ、而して堅固なる體格と武道的氣概とを養成せしめる。
開手型は幾何かの攻防の術が連結せられたもので、型を色々の演武線を描きて運動をなして居る。その動作は實戰的で、術の目的に適合する樣に心氣と體力を有効に運用轉換せしめる型である。
組手は敵對行爲の型で、柔道のきめの型と同じである。組手練習を三つに分つ事が出來る。

イ、單式組手
ロ、複式組手
ハ、眞劍組手

眞劍組手は今までの組手稽古と異つて、實際に打ち込み、蹴ると云ふ眞劍試合が之れである。
複式は相手が攻擊する時、受けて攻める、敵も亦之れを受けて防ぐと云ふ形が之れである。
此の三つである。單式組手は相手が攻擊する場合、受けて當てる、と云ふ一擊の簡單な形で、

C 受け方基本練習法

構へ方
双方約二尺位の距離に相向つて、共に左足を一歩前に出して構へる。
甲は攻擊ばかり乙は受けばかりときめる。
受け方
初め甲が右拳を以て乙の水月部を突く、乙は右手を以て其の手を內横受けをなす。(圖解參照)
次に乙は其の手を右手を以て外横受けに變る。
第三に乙は左手を以て、敵の手を拂ひ受をなして、右拳を以て甲の水月に當てる。
甲は乙が受けた通り、初め横內受をなし、第二に外横受、拂ひ受と云ふ様に、之れを双方交る交るに練習す。之れは受け方の練習ばかりではなく、各自の腕を強くする爲めで、丁度劍道の



內横受けの型

ヤートーと同じで、充分効果がある。
(第廿七頁より第三十頁までの挿繪を參照して練習せられよ)



外横受けの型

說明第二十六頁參照



拂ひ受けせんとする刹那

說明第二十六頁參照



内拂ひ受

説明第二十六頁参照

第三章　開手型・十八（セーパイ）の型

十八の型第一圖



（一）構へ方。足は結び立ちに立ち、左手は上に右手は下に重ねて、手掌を睾丸部に當て、顎を引き付けて、眼は眞直に前方を見、肩をさげて、丹田に氣を沈め、足は上下引合す樣に踏み立つ。（型第一圖參照）（足の立ち方は拙著「護身術空手拳法」參照）

十八の型第二圖



（二）左足を一步後方に退きながら、體を右半身に開きつつ、左手は開いたまゝ下より上に向け圓形を描きつつ水月の處に置き、同時に右手は開いたまゝ、右前に突き出す。其の時指先きを延ばし、甲は右、掌は左に向け、足は四肢に踏み立ち、背を眞直に立つ。（型第二圖）



十八の型第三圖

(三) 左足を一歩前進しながら、左手を下に右手を上に、合掌に握り合せて、脊を眞直に立つ。(型第三圖)

(四) 右足を更に一歩進みながら、合掌に力を入れ、右甲を下に左甲を上にして、其のまゝ突き出す。(型第三圖の左右反對の型)



十八の型第四圖

(五) 足は其のまゝ四股に立つと同時に、腰を落し、右臂は下より上にはねあげる樣にして前に出し、左臂は腹部に落す氣持ちにて下にさげる。(型第四圖)



十八の型第五圖

（六） 左足を一歩前進しながら腰をひねり、斜に體を振り向くと同時に、右足を曲げ、左足を延し、左手は水月より足部に向けて手刀にて打ち落す氣持ちにて左足の處に下げ、右手は掌を下に向け開いたまま肘を肩と並行する樣に前方に置き、其の時掌は水月部に體は右斜にして前方を見る。(型第五圖)



十八の型第六圖

（七） 姿勢は其のまま左手は開いたまま裏受けをなす。(型第六圖)

十八の型第七圖



（八）同時に、腰を前方に向けると同時に、右手刀にて横受けをなし、左手は掌を前に向けて左腋下に置く。（型第七圖）

十八の型第八圖



（九）右足にて前方を蹴りあげて（型第八圖參照）元の位置に足を引き、同時に腰を落して四股に立ち、左臂當てをなして、同時に其の拳にて裏打ちをなす。其時右拳は右腰の處に握つたまま構へる（型第九圖）

十八の型第九圖



說明は前頁參照

十八の型第十圖



（十）其のまゝの位置にて、後に振りむくと同時に、右足を前に左足を後に、猫足立ちの構へに變じ、右拳は下より上に圓形を畫く樣にして横受けをなし、其時左拳は右臂の處に置く、（型第十圖第十一圖）

十八の型第十一圖



前頁の第十圖を正面より見たる圖。

十八の型第十二圖



（十一）其のままの姿勢（即ち第十圖の如く後向きの姿勢）にて、右を開いて掌を前方に向く。（型第十二圖但し此圖は正面より見たるもの）



十八の型第十三圖

(十二) 左足を半圓になる氣持にて前方へ一歩進めると同時に、左手は下より頭の上に高く差し上げつゝ、下に落して、左腰の處に握つたまゝ置き、體は後方に振り向くと共に腰をひねる樣に力を取り右拳は其のまゝ水月部より斜に突き出す氣持ちにて、左側の處におし出す(型第十三圖)



十八の型第十四圖

(十三) 其のまま後方に振り向くと同時に、左手は開いたまま、顔を中心として下より上にあげて、左腕の處に掌を前に向けて構へ同時に右足は半圓を畫きつつ、左側斜に一歩進み出し、右掌にて下より上にははねあげる樣な姿勢を取る。(型第十四圖)



十八の型第十五圖

（十四） 左掌を下より上に圓形を畫く氣持にて、左足側の處に拂ひ受けをなし、其のまゝの姿勢にて前に寄り足にて一歩進み、右手掌は水月部の前におし當てる。（型第十五圖）



十八の型第十六圖

（十五） 右足を一歩進めて四股に立ち、右は上に左は下にして（掌を向ひ合せて）圖の如く姿勢を取る。（型第十六圖）



十八の型第十七圖

（十六）圖の如く兩手を其のまま（開いたまま）左右に開くと同時に　右足は内側に向つて拂足をなし（型第十七圖）、同時に兩中高指拳にて、下に向けて突き落す。（型第十八圖）而して右足を一歩後方に退き、左手にて拂ひ受けをなす。右拳は腰に足は四股に構へる。（型第十九圖）



十八の型第十八圖



説明は前頁參照。



十八の型第十九圖

説明は第四十八頁參照。

（十七）其のまゝ眞直に立ち、右手掌にて上より下に拂ひ受けをなし、左手掌は開いたまゝ水月部に當て、一歩寄り足をなす（第十四の反對）

（十八）左足を一歩進めて四股に立ち（第十五六の動作と同じ）、左足にて拂ひ足をなし、兩手は左右に開いて、すぐ兩中高指拳にて下方に向けて突き、左足を後方に一歩退くと同時に、右手にて拂ひ受けをなす。（第十六の動作參照）

（十九）右足を前方に一歩出すと同時に、後方に振りむき、猫足立の姿勢に取りて左手にて横受けをなし、右手は握つたまゝ額面に振り突きをなして構へる。其の時兩拳は互に指が向き合ふ様に構へる。



十八の型第二十圖

（二十）右足を一歩前へ進して、左足は外側に圖の如くして、右手にて横受けをなし、左拳は頭上に置いて構へる（型第二十圖）



十八の型第二十一圖

（二十一）其のままの位置にて、體を左側に振り向くと同時に、左手にて掛けて受けをなす氣持にて、甲を上に掌を下に向け、左手は前に少し延ばし、右手は甲を上に掌を下に向け、水月部の處に置きて構へる（型第二十一圖）

十八の型第二十二圖



（二十二）腰を少しねじる氣持にて、足をねじると同時に、左拳にて圖の如く足部に向けて打ち落す（型第二十二圖）

十八の型第二十三圖



（二十三）足部に向けて打ち落した左拳にて敵の顔面に向けて裏打ちをなす（型第二十三圖）

十八の型第二十四圖



（二十四）左拳にて裏打ちをなすと同時に、顔を敵の正面に向け右手にて横受けをなし、（型第二十四圖）右足にて前方を蹴りて（型第二十五圖）元の位置に足を引き、腰を落して四股立に構へ、同時に左拳にて敵の腹部を突く（注意、其の時の拳は指を上に甲を下に向けて突き、右手は開いたまま、掌を左側に

十八の型第二十五圖



むけて水月部のところにおき構へる。

（二十五） 左足を其の場より少し前に出すと同時に、體を右側にむけ、右手にて前のように掛け手受けをなす。其の時左手は水月部の處に甲を上に掌を下にむけて構へる。

（二十六） 前の動作のように右拳にて、足部にむけて打ち落し、同時に其の拳にて敵の顔面を裏打ちし、體を正面にむけると同時に、左拳にて横受けして、左足にて蹴り、其の足を元の處に引き、體を四股立に變じて、右拳にて敵の腹部を突く。其の時の構へは、右拳は指を上に、甲を下にし、左手は掌を前にして、水月部にあてる。立ち方は四股立。



十八の型第二十六圖

（二十七） 左足を左側に一歩退くと同時に、體を猫足立ちに構へ、兩手は右手を上に、左手を下に、圖の如く互に掌をむけあはして構へる（型第二十六圖）



十八の型第二十七圖

（二十八） 右足を一歩後方に引くと同時に、兩手は握つて、右は下に、左は上になる様に丁度ねじまはして引く氣持にして變ず（型第二十七圖）



十八の型第二十八圖

（二十九） 右の動作をはると同時に、左手は開いて右拳槌にて左足の前の處を打ち、左足を引いて結び立ちの姿勢になり、兩手を合せて初めの構へとなる（型第二十八圖）

＝十八の型終り＝

第四章　十八の型分解説明

型第一圖は構へ方。

型第二圖の動作は、敵が我が水月部を、右拳を以て突き來る場合の受け方。

敵が右拳を以て、我が水月部を突いて來る時、我は左足を一歩後方に退き、同時に我が左手にて敵の拳を上より下に向けて拂ひ落し、同時に我が右拳にて反對に敵の水月を突く。



分解第一圖

型第三、四圖の動作は兩手にて敵が我が右手首を取りたる場合のはずし方（分解第一圖）



分解第二圖

敵が兩手にて我が右手首を握り取りたる時、我が左手を右手と合し（型第三圖參照）、其のまま下より上に半圓を畫く如く敵の兩手（卽ち握りしまま）を逆に押し返し、分解第二圖の如く左手刀を以て敵の面部を打ち込む

若し敵が力が强くてはづれない場合には、一旦逆にはね返したのを、其のまま腰を低く落して型第四圖の如く右臂にて、敵の握りし兩手を下より上にはねあげる。



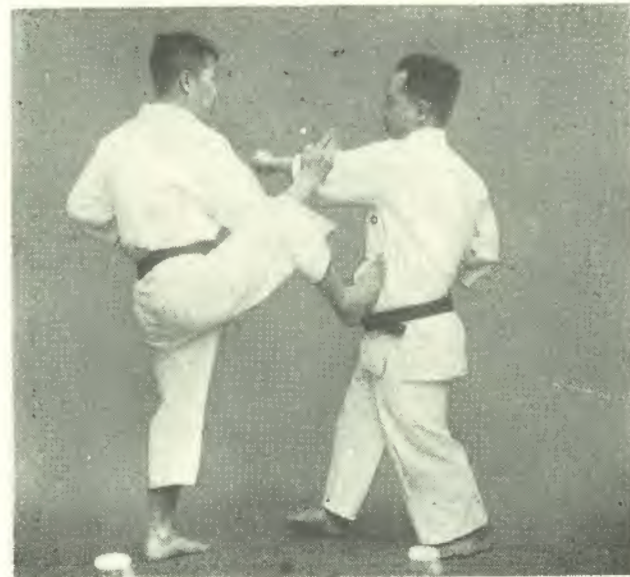
分解第三圖

型第五六七八九圖の說明

敵が右足を以て我が腹部に蹴りあげ、更に右拳を以て攻擊する場合の受け方。（分解第三圖）

型第五圖の動作は、敵が我が腹部を蹴らんとする時、我は體を斜に向け、腰をねじ、同時に左手に圖の如く下段拂ひ受けをなす。（型第五圖）

敵が更に右拳を以て、我が水月部に突き來る時は、我は足を拂ふた左手を以て、敵の拳を裏受けし（型第六圖）、同時に我が右手刀を以て、敵の首筋を打ち込



分解第四圖

むべし（型第七圖）
倘敵が左拳を以て、我に攻撃する場合は、我は右手刀を以て、敵の拳を横打ちし、同時に我が右足にて敵の腹部を蹴り込む（型第八圖、分解第四圖、同第五圖）と同時に敵の水月部に左肘當をなす（型第九圖）



分解第五圖

說明は前頁前照



分解第六圖

型第十、十一、十二、十三圖の說明。

敵が右拳を以て突いて來る場合(分解第六圖)の逆の取り方。

敵が右拳を以て、我が水月を目がけて攻撃する時、我は左足を一步後方に退くと同時に、我が右腕にて外橫受けをなし(型第十、十一圖)、其の受けた右手にて敵の突いた手首を取る(型第十二圖)と同時に、我が左足を一步前に(敵の前)深く進み出ると同時に、我が左手にて敵の手を逆に取る。(型第十三圖)



分解第七圖

敵に逆を取られた時の受け方。

分解第七圖のように敵に我が右腕を逆に取られた時、我は左手を以て敵の逆に取り臂の處を押すと同時に、我が右手を引き右足にて敵の膝頭の處を蹴りおろし、同時に其の足を敵の前に踏み入れ、我が尻にて敵の腹部をはねあげると敵は投げ飛ばさる。



分解第八圖

型第十四圖の說明

若し逆に取りし手を前の如く受けようとした場合には如何にして防ぐか。

逆に取りし敵の手を敵が前の方法で以て受け樣とした時、我は敵の手首を握りし手をはなすと同時に、體を敵に向けて、右足を敵の股の處に入れ、同時に我が右手にて敵の金的を押し當て左手は敵の胸部を押す（型第十四圖、分解第八圖）



分解第九圖

型第十五、十六、十七、十八圖の說明。

敵が左拳左足を以て同時に攻擊するのを如何に防ぐか。

敵が左拳と左足を以て同時に攻擊する時、我は少し體を斜にして、左手にて敵の蹴り上げる足を拂ひ取り、我が右手にて敵の突いて來る手をすくい受け（型第十五圖、分解第九圖參照）同時に我が右足を一步敵の後方に踏み出し、敵の手を押へた右手を其の腋下より首の處に差し入れ我が右足にて敵の足を拂ふと



分解第十圖

敵は倒れる（型第十六、十七圖分解第十圖）其時我は左右兩方の中高一本拳にて敵の金的と水月を同時に突き當てる（型第十八圖、分解第十一圖）



分解第十一圖

說明は前頁參照

型第二十圖の分解說明。

敵が右拳を以て、我に攻擊する場合、我は體を少し左側に變じ、同時に我が右手にて敵の突き來る腕の關節部の處を、下より上に橫受けして敵を押へ、同時に左拳にて振り突きする。

型第二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七圖の分解說明。

敵が右足を以て我が腹部目がけて蹴りついて來る時、我は型第二十二圖の姿勢の如く體を後方にねじつて、我が左拳にて敵の足（蹴りついて來る足）を打ち落し、同時に其の左拳にて敵の顏面を裏打し（型第二十三圖參照）、

再び敵が左拳にて我が水月部に攻擊する時は、我は右手にて（型第二十四圖）の如く橫受けし、

同時に我が右足にて敵の腹部を蹴る（型第二十五圖）

尙ほ引き續き敵が右拳にて我が顏面に攻擊する場合、我は右足を一步後方に退きて、四股立に變じ、我が左拳にて敵の腹部を當てる。

（型第二十七圖、分解第十二圖）



分解第十二圖

說明は前頁參照



分解第十三圖

敵が我が顔面めがけて突き來る場合の逆投げ。

敵が我が顔面めがけて突いて來る場合、我は右足を一歩後に引くと同時に、我が右手にて敵の突いて來る手首を下より上に上段受けをなす（分解第十三圖）と同時に、其の手首（右手首）を握りて少し横に押して、敵の體を崩し、再び敵が左手を以て我が水月に突いて來る時、我は左手にて下より上に掬ひ受けをなして、敵の手首を握り取る（分解第十四圖）而して其の取りし



分解第十四圖

兩手を、分解第十五圖の如く上より下に向けて逆に取り、我が足を後方に引きて倒す。

倒れた敵の兩横面を、我が兩拳鎚にて打つ（分解第十六圖）。



分解第十五圖

説明は前頁参照



分解第十六圖

説明は第七十八、九頁参照

附録

武備誌

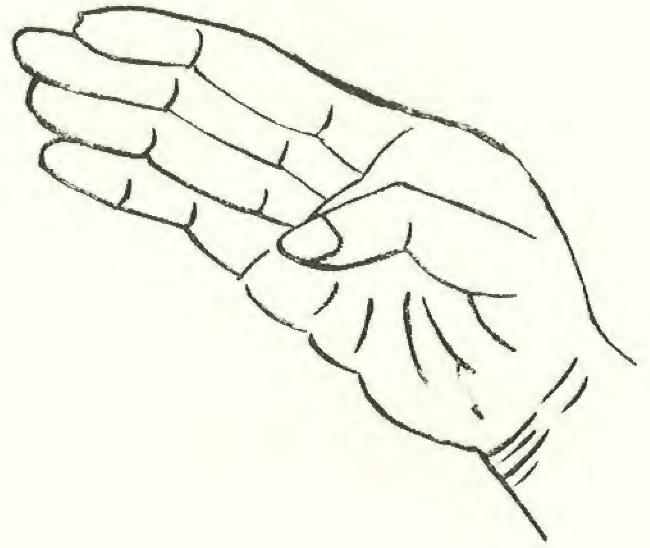
參考資料記載に就いて

摩文仁賢和

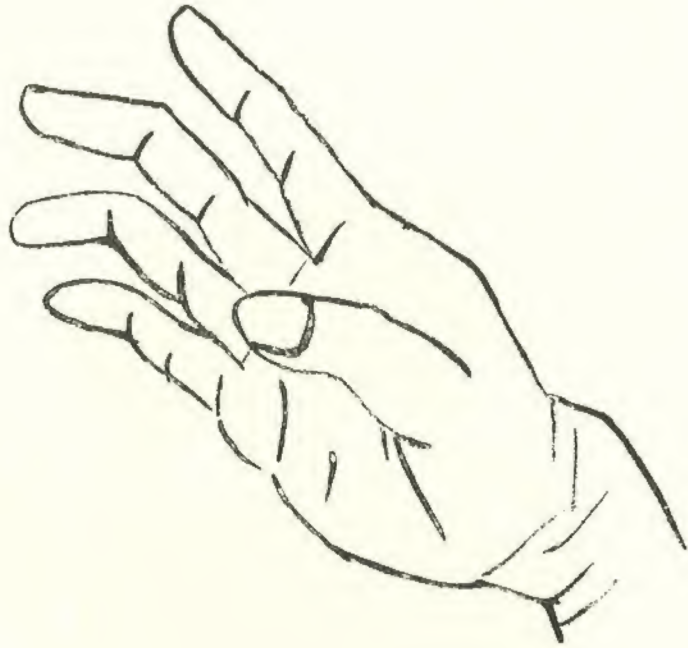
我恩師糸洲先生が支那の武備誌と云ふ拳法の書籍より寫されたものを、拝借して之れを寫し、今まで研究參考の材料として非常に大切に秘密に藏して居たが、友人の勸めもあり、又目下空手拳法の全盛時代、一日として自己一人の私するに忍びず、遂に之れを記載せし所以である。

熱心なる研究者に少しでも益する事が出來れば幸甚の至りである。

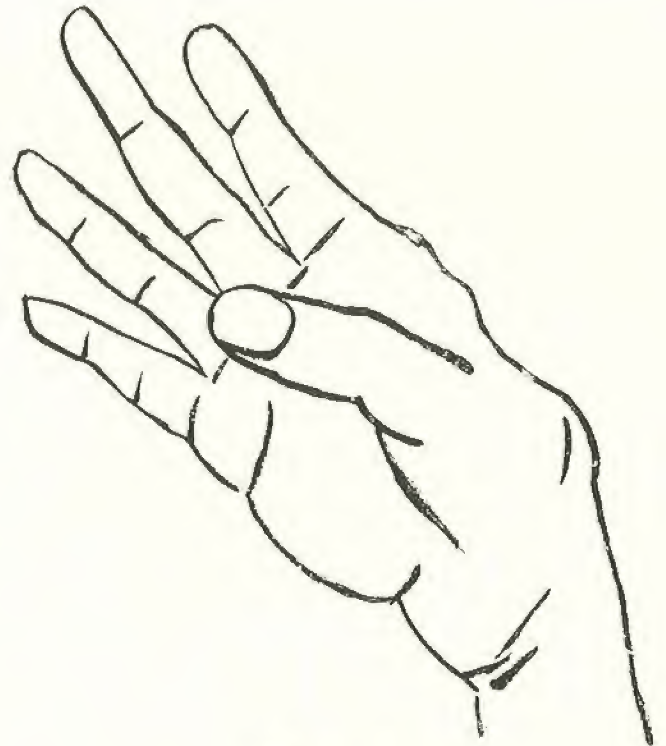
六氣手（昭林流）



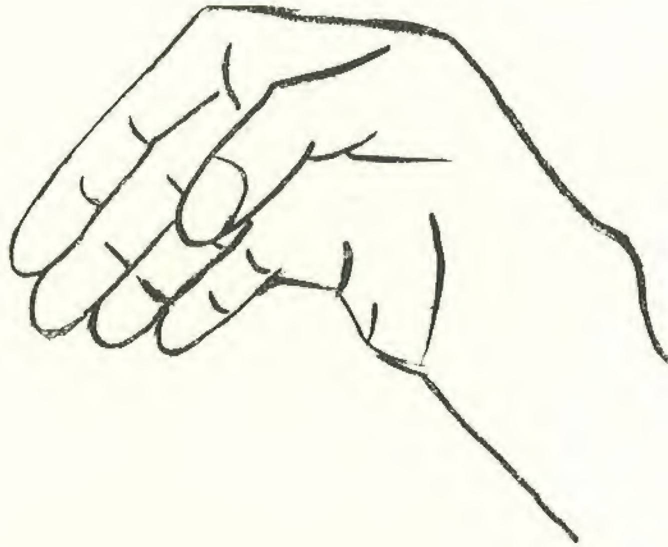
此手名鐵骨手打入人君
須用此手或曰飯前打入
君生吐血飯後打入人君
魄散魂飛



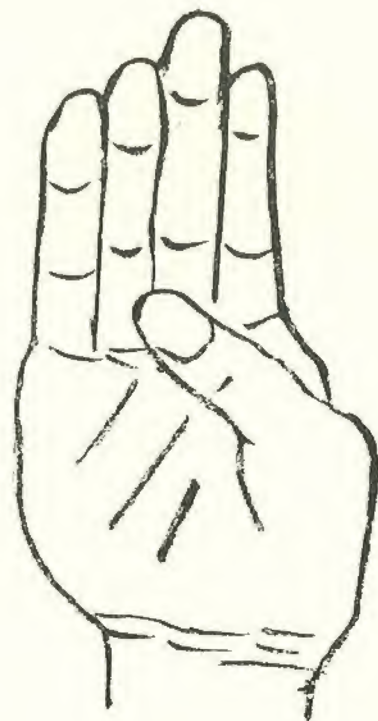
此手名爪子打腮邊並全
圈下用之若打速着藥治
之不醫吐血三人一月而
死矣



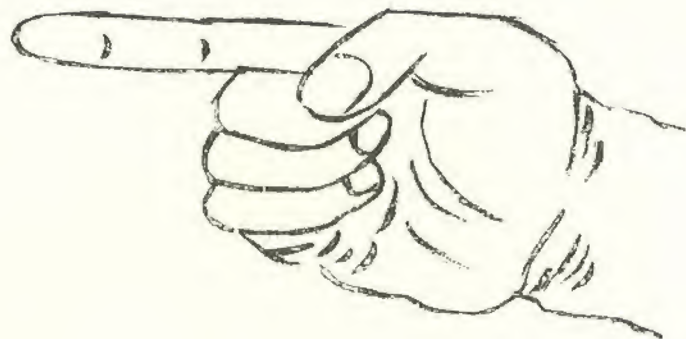
此手名鐵沙手用火煉成打入人後鐃用之若打入肉則爛速藥治之醫則死



此手名曰撒攪手打入人首血池用之若打其人可用姜水救之千萬不可到乖



此手名曰向天刀手打入
人骨節觔內用之打中不
能言速着藥治之不治死



此手名一路草技手打入
人腷背骨之用若打着藥
治之到久不醫半年必死

解脱法

欲攻東先打西。
髮被搏用巨戟。
我倒地入他騎。
扭我臚捐他面。
離吾身用逆踏。
脚踢高務隨後。
來吾裙用膝脫。
他勢低勿用足。
取我上、隨他下。
搖步來防他踢。

欲踏前務隨後。
欲打他破天柱。
若抱後天撞後。
殺含泥戟他喉。
右欲損、右先椅（ウス）、
椀吾手用吾椅。
欲踏我、只用撲。
他勢高入於中。
扯我髮用脫甲、
手足相隨方無失。

欲轉身剛柔力。
他倒地頓他、勝。
若抱前調他陰。
臨吾身用吾棒。
脚欲踏手先戟。
搆吾袖用戟棒。
欲踢他須用釣。
取我下戟他上。
鎖吾喉用大砍。

拳足筋骨立様（邵靈寺流）



二



一

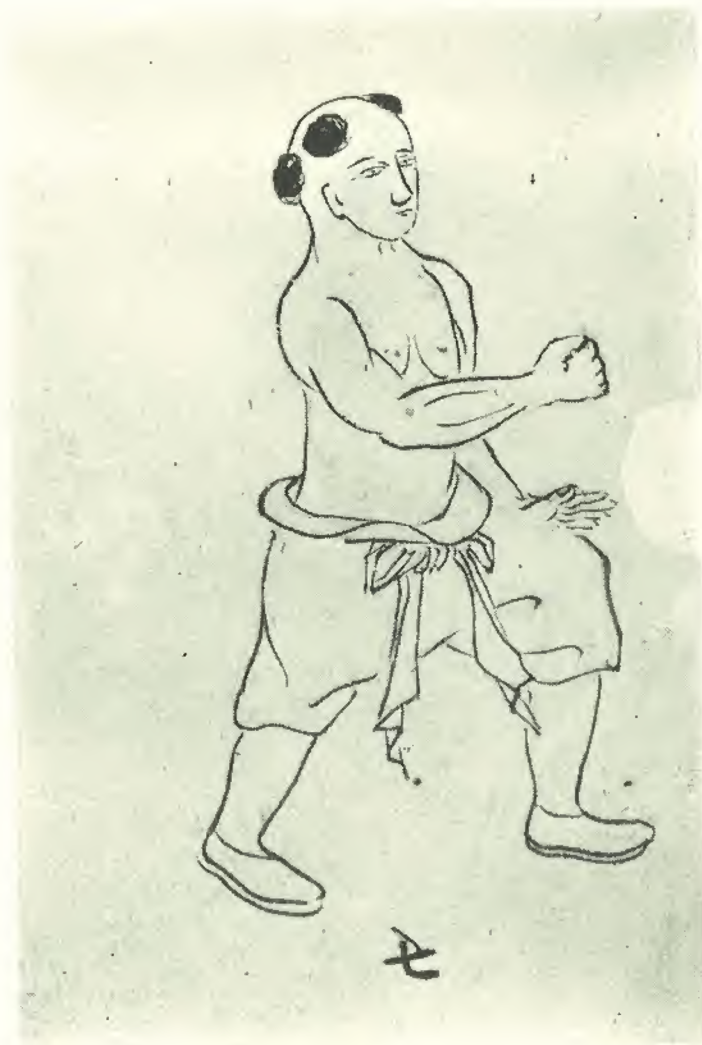

三


四


六


五


八


七



九



十



十一



十二


十三


十四


十五


十六



十七



十八


十九


二十



二十一



二十二



二十三



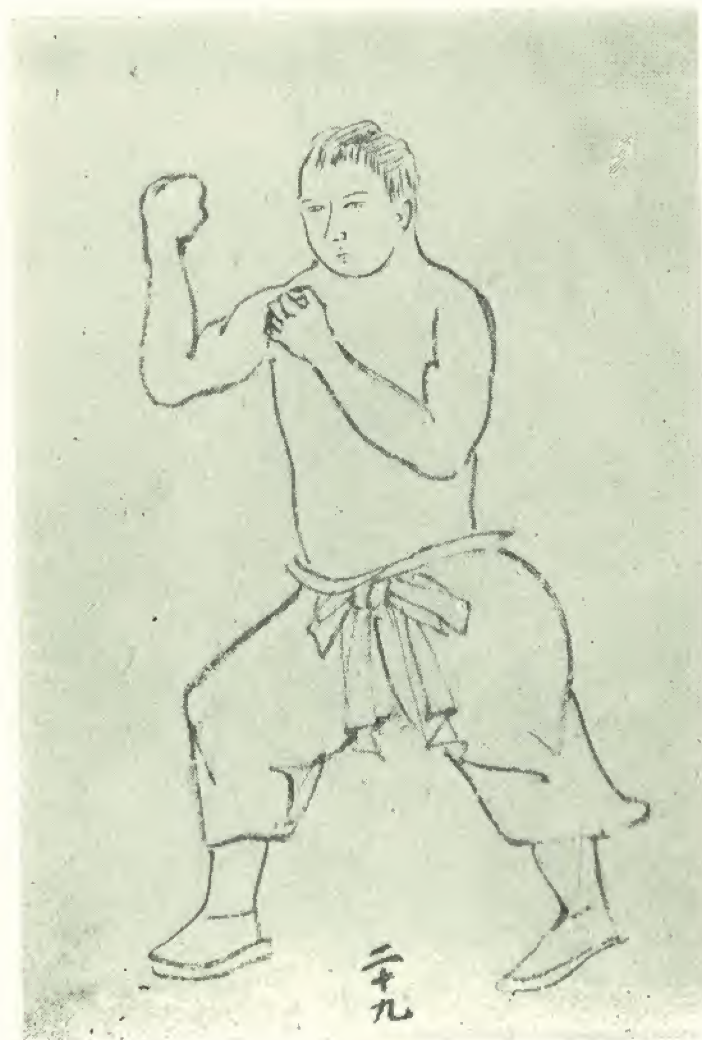
二十四


二十六


二十五


二十八


二十七


二十九


三十


三十二


三十一


三十三


三十四

古法大剛論章

再論、吾所ㇾ學此法度。理㆓明十二時辰㆒。血脈按㆓分子午之法㆒。凡世人須㆓ㇾ受此法㆒。止ㇾ可ㇾ救ㇾ人不ㇾ可ㇾ害ㇾ人也。有㆓人通ㇾ竅者㆒當門之教也。法有㆓輕重之殊㆒。故立㆓交接之道㆒以㆓熟能生巧㆒多中。則彼疎懶者必難ㇾ用。凡ㇾ有㆓與ㇾ人打ㇾ栁此勢其理一也。尤左㆓迅速㆒。不ㇾ可㆓ㇾ作兒戯㆒。逢ㇾ空則入。遇ㇾ逃則趕。須㆓斟酌㆒。恐㆓失接㆒。旁人視ㇾ之謂㆓我淺學㆒、比勢者顧㆓上下左右㆒。分作之門。拳手之法。順則用㆓草逆㆒逆則用㆓確中㆒遇ㇾ逃緊追。逢ㇾ空緊入、逃ㇾ之則去而來。順ㇾ之則來而去。在ㇾ上用㆓蝴蝶双飛㆒。在ㇾ下用㆓撥水求魚妙手㆒。虎狼之勢。猛虎之威。交ㇾ手應ㇾ之法。在㆓着力認眞曉得㆒。剛柔虛實。剛來㆓柔中㆒柔來㆓剛中㆒剛刮柔發。身搖、脚踏、蝪起　身隨㆓于門戶㆒。規矩進退、不ㇾ可㆓量情㆒是也。

十二時血脉的死注氣
大位急持可用不可動

血脉行腸腑一日死

子時



血脉行血盆十四日死

丑時





血脈行頭
二十日上死
寅時
一日死
二十日死
太
文



血脈左
二十日死
卯時
太陽
合谷
京骨
京骨

血脉受肝[illegible]七歩死

辰时



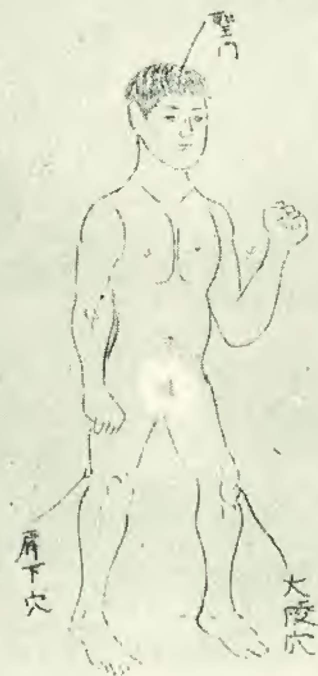
血脉左腸[illegible]三年死

巳时



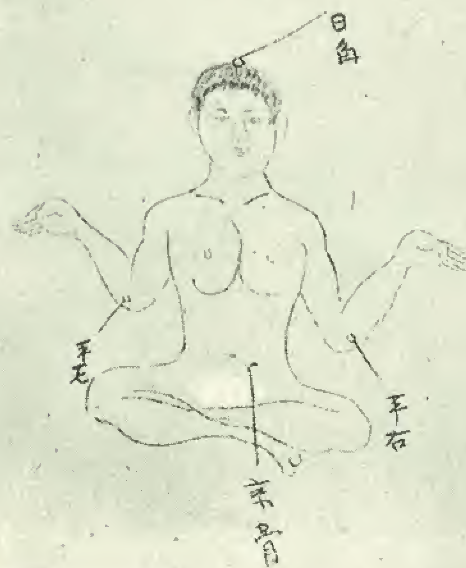
午時

血脈在中心不可動



未時

血脈在乳換一年死

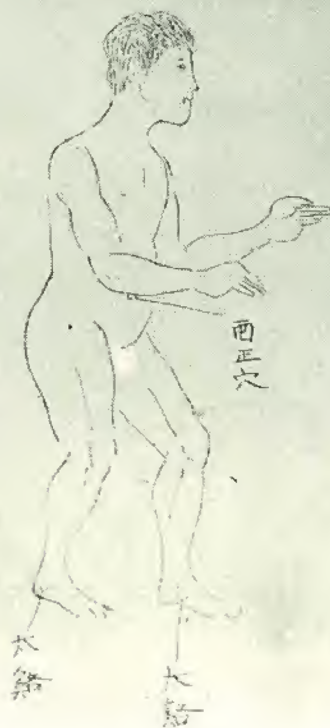



申时
血脉在二脉下十四日死
鈌盆
鈌盆


酉时
血脉在軟骨尾二日死
心胞
冗骨

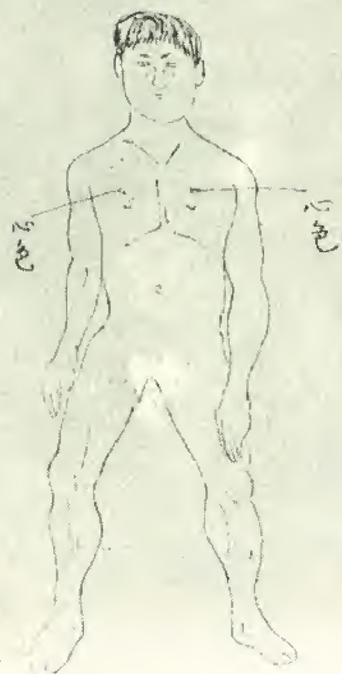
戌时

血脈在腸経三日死



亥时

血脈在肝経七日死



七不打

額門　一不打頭頂心是也

腦後　二不打後枕骨是也打則死

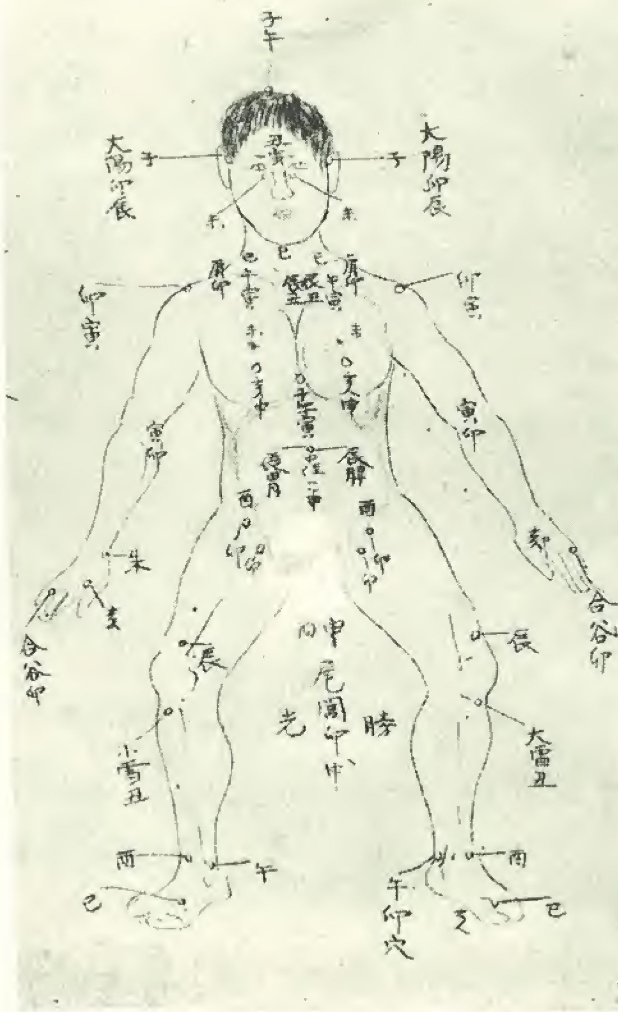
喉　三不打上擊下則死

兩耳後　四不打上午在左耳穴下午左右打閉則死口不能閉

臍上至心窩兩邊橫　五不打打則死

下陰　六不打打則死又橫肚西邊橫刈若打吐血死

乳　七不、打乳下第二骨內上午左穴爲脉下午右穴爲脉若打此兩邊穴端的兩月餘斷難醫活



四不治症

大凡打傷鎗刀所傷

一、口開不治　不能接氣

二、發陰下治　身體手足冷凍

三、目不轉珠不治　精神散

四、心撞不治　內腑已壞五金崩已

○

此手法及藥症乃、昭林寺傳流至今凡學拳法須要時溫煉熟認眞百發百中無有不中也。

○

男人卅六穴左邊起女人卅七骨穴從右邊起春天血在人肩下第四骨起至谷兩三日過位夏天時血在肩下在七骨起至大暑第五日止过位秋天血在左邊第七骨起至寒露七日爲止冬天時血在第九骨起至大寒九

日爲止應子午四季血脈要接

神農琉璃腸一日食百草醫百病救百人知此穴位不傷人正可救人如他人被打傷用此藥救之可也。

○

十二時血脈藥方神効　若無青草用此君臣解之

子時用藥　澤首一分沈香不乳香不　老酒一杯煎半杯服下

丑時用藥　射香一不茯苓不紅花不手七不　酒一杯煎半杯服下

寅時用藥　射香不沈香一分澤首二分肉桂二不手七二分　酒一碗煎一杯服

卯時用藥　眞珠一分射香二分蛇胆二分万毒虎二分　浸酒服

辰時用藥　紅曲一分白糟一分青桃仁五卜地枇杷二紅花二　酒煎服下

巳時用藥　上步用紅花二分下步用手七二分　沖酒服下

午時用藥　蛇胆二分庶香頭二卜香射子七分紅工絲二卜　酒三碗煎一碗服
未時用藥　杜仲一卜乳香二卜丁香二卜肉桂二卜　沖酒空心服
申酉時用藥　麥二卜右秦心二分水碗半煎八分　空心服
戌亥時用藥　紅二卜藩山紅二卜紅土絲一卜万毒虎二卜　擂末沖酒服下



組手篇


青龍出抓手勝
丹鳳朝陽手敗


扭當胸手敗
擒後捽手勝


出戰機手敗
伸猿背手勝


猴穿針手勝
虎爭食手敗


將軍抱印手勝
孩兒抱蓮手敗


兩通身手敗
雙拜令手勝


身化边门用
三角戦手勝
進步單機手


雙龍戲水手敗
獨拿金獅手勝

龍吐珠手敗

鳳展翅手勝



拿拨剪手勝

穿心短手敗




鎖喉寒陽手勝
扭髮撞腦手敗


番雙鈸手敗
落地剪股
用假鈸勝


撓水求魚手敗
落地交剪勝


鳳啄珠手勝
鶴開翼手敗

刀牌法手敗

擭鼓勢手勝



鯉魚落井敗上

金蟬脫殼勝下



獨戦襲門手敗

単刀赴會手勝



小鬼抜闖手勝

羅漢闖門敗



後背伏虎手敗

後亭揉標手勝



雷打樹手敗

雨殘花手勝




雙龍戲珠手勝
白猴折筝手敗


弄雙虎手硬
擒青牛手化胶前步勝


雙合掌手敗
獨垂戦手勝


連地劄葱手勝
登山大虎敗

手足齊到敗

羅漢播身勝



弄草枝手敗

醉羅漢勝





存一朶手勝
獨角半手敗



短打穿心手敗之勝也
孩兒抱連手敗

孫武子云

「知彼知己百戰不殆。不知彼而知己一勝一負。不知彼不知己每戰必殆。故心先自家體認眞熟隨時變化。此所謂不戰而屈人。兵之極善者也。」

昭和九年十月二十三日印刷納本
昭和九年十月二十五日發行

空手拳法十八の研究
定價金壹圓五拾錢
（送料八錢）

著者　摩文仁賢和
大阪市西成區津守町四一三

發行兼印刷人　仲宗根源和
東京市下谷區谷中清水町二〇

發行所　空手研究社　興武館
東京市下谷區谷中清水町二〇
振替東京三九七七三番



發賣所

栗田書店
東京神田區表神保町二
電話神田二二八九番

照林堂書店
東京市神田區錦町一ノ二
電話神田二七九八番

柳原書店
大阪市東區北久太郎町四ノ一六
電話船長四一四・四七九〇番

大日本拳法關西空手術研究會々長
關西大學其他各學校空手師範
剛柔流空手拳法大家
摩文仁賢和先生著

攻防自在 護身術空手拳法

◇ポケット型美装箱入◇
◇挿絵八十頁◇
◇口絵八頁◇
◇定價金壹圓廿錢（送料八錢）

新刊・好評嘖々

◇**東京各大學空手師範富名腰義珍先生**曰く「摩文仁賢和君は私の竹馬の友で、近世稀に見る空手研究家で現在の專門家中錚々たる者である。君が久しき間に蒐集した材料は餘程の數に達し、今日各種の型を多く知つてゐる點に於て君の右に出る者恐らくはあるまい。」

◇**講道館長加納治五郎先生**は昭和二年一月沖繩旅行の際、二日間にわたり著者の空手實演を見學の上非常に感嘆激稱せられ攻防自在全國に宣傳せらるべし」と推賞された。

◇**警視廳空手師範小西康裕先生**曰く「畏友摩文仁賢和君粒々辛苦の結晶「護身術空手拳法」の著は眞に宜適した企てと謂ふべく正に行詰らんとする我武道界に新機向を指示すると共に又國民體育向上に資する事甚大なるを確信して疑はぬ。本書說く所平易簡明にして親切周到を極め微に入り細を穿ち、加ふるに文意面白く趣味津々として自ら卷をとずるを忘れしむるの慨は何人も追隨し能はざる好著である。」

發行所
東京市上野公園護國院大黑天脇
振替東京三九七七三番
（空手研究社）興武館

改防自在 護身術空手拳法 に對する世評の一部。

◇**大阪毎日新聞**「著者は知られた達人、空手拳法の大要を極めて簡潔に、ユーモラスな圖解入で說きつくしてある。」

◇**報知新聞**「板割や瓦割が空手術の全般ではなく寧ろそれは餘技に過ぎなかつた。本書は斯道の大家たる著者がうん奥を披れきして詳細平易に指導せんとしたものである。」

◇**北信毎日新聞**「時節柄男女共一讀すべき書物である。繪入りで親切丁寧に說明してあるから何人にもよくわかる」

◇**中國民報**「往昔達磨大師が子弟に教授した拳禪一味の健康法修養法としての拳法が琉球に傳はり、武術として特殊の發達をなした。此の秘法相傳の空手も今日は各地に普及されてゐる、本書は身に寸鐵を帶びずして攻防自在、時間も金もかゝらず個人でも團體でも練習出來る護身術として又健康法として理想的のものである。」

◇**小樽新聞**「現今行はれてゐる強健術、武術の中で老幼男女を問はず誰れでも容易にかつ自由に行はれ、しかも十二分の効果をあげ得るものは空手術であるとして時代に適應せるところ今や全國的に普及せられ各方面で空手熱が盛んとなつてゐる。本書は剛柔流空手拳法大家にして關西大學その他各學校の師範摩文仁賢和氏が多年の鍛練の結果を平易簡明にしかも一つ一つ挿繪を用ひて親切に教へた書である」